

Title	W・H・フリードランド C・G・ロスバーグ二世共編『アフリカ社会主義』
Sub Title	W.H. Friedland & C.G. Rosberg, Jr. (eds.) : African socialism, 1964
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.4 (1965. 4) ,p.108- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650415-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

係、考え方等の類似性が、東南アジアの全歴史を通じて観察される」として、多様性の根に流れる同一性を歴史的に把握しようとしている点に、筆者は特に興味を感じるのである。

(松本三郎)

William H. Friedland &

Carl G. Rosberg, Jr. (eds.):

African Socialism

Stanford U. P., 1964, xi+313pp.

W・H・フリードランド

共編

C・G・ロスバーク二世

『アフリカ社会主義』

一 本書は、標題の示すごとく「アフリカ社会主義」に関する論文集である。

こんにち、非ヨーロッパ地域が世界の舞台へ主体的な役割をになつて登場し、現代史のハリゾントルが急激に拡大したために、ヨーロッパの現象のなから抽象されたあらゆる社会科学概念および諸価値は、その適用可能性もしくは普遍性をめぐつてひとしく再検討をせまられているが、社会主義もまたその例外ではない。社会主義

は、そもそも原初的には、高度に発展した資本主義の遺産である大規模な生産力を土台とし、生産の無政府性を除去しつつ分配の平等化を実現するための制度であつたが、それがロシア、中国等の比較的後進的な地域で実践化されるにあつて、むしろ力点は、低水準にある生産力を高度化させるという側面に移行するにいたつていゝ。いいかえれば、社会主義の現代的意義は、むしろ遅れた地域の工業化を急速におしすすめるためのテクニクとして効果的である、という側面にもつとも多くみとめられるのである。したがつて、工業化を中心的課題としてになつている現代低開発諸国の多くが、なんらかのかたちで「社会主義」的發展のコースをたどらうとしているのも、あながち不思議なことではない。

ところで、これらの低開発国社会主義は、その多くがヨーロッパ的社会主義のバリエーションと考えられるが、なかにはヨーロッパ社会主義の系列にまつたく属さない社会主義も存在する。本書のテーマであるアフリカ社会主義もそのひとつである。アフリカ社会主義は急速な工業化という実践的要請から生まれ、それをアフリカの価値のうえに基礎づけたイデオロギーおよび運動であるとみなすことができる。それは部分的にはヨーロッパ社会主義の影響を受けているが、全体としては前述のように非ヨーロッパ的な性格をもつ社会主義である。

しかしなにもぶんにアフリカ社会主義は、単一の思想家によつて展開されたものでないだけにイデオロギー的統一性をいちじるしく欠いており、またごく最近にいたつて登場してきたものだけに極め

て未熟な概念である。

したがつて、その実態とイデオロギーを正確に捕捉するのは、極めて困難な作業であるといわなければならぬ。こうした現状からして、ここに本書が、アメリカの研究者を中心とし、それにイギリス、ソ連の研究者をもくわえた一二名のアフリカニストの論稿を収録して、政治学、経済学、社会学、文化人類学等さまざまな角度からする「アフリカ社会主義の総合的研究」といつたかたちで出版されたのは、まことに意義ふかいことといえよう。ここに本書を紹介するゆえんである。

二 内容の紹介にすぎだつて、その構成を目次で示せば、つぎのごとくである。

序論 アフリカ社会主義の解剖

W・H・フリードランド（コーネル大学副教授・社会学）

C・G・ロスバード二世（カリフォルニア大学副教授・政治学）

第一部 定義と探究

一 基本的な社会的諸傾向

フリードランド

二 アフリカ社会主義の経済学

C・モース（コーネル大学教授・経済学）

三 社会主義と伝統的アフリカ社会

I・コピトフ（ペンシルバニア大学助教・文化人類学）

パン・アフリカ・イデオロギーの社会主義的源泉

D・ネルキン（コーネル大学研究員）

五 一社会主義者のアフリカ社会主義観

紹介と批評

M・ロバート（フェビアン協会）

六 アフリカ社会主義について——ソヴェトの見解

I・I・ポテーヒン（ソ連邦科学アカデミー・アフリカ研究所所長）

七 ダカール会議——教義の探究

A・Z・ゾルバーク（シカゴ大学助教・政治学）

第二部 国家計画

八 ガーナの社会主義について——政治学的一考察

C・リーガム（「オブザーバー」紙・アフリカおよび英連邦特派員）

九 ギニアとセネガル——アフリカ社会主義の対照的二類型

C・F・アンドレイン（カリフォルニア大学・政治学）

一〇 マリ——「計画化社会主義」の展望

K・W・グランディ（州立サンフェルナンド・バリー・カレッジ助教・政治学）

一一 タンガニカ——ウジャマアの探究

F・G・パーク（シラキューズ大学教授・政治学）

なおこのほかに附篇として、G・パドモア、J・K・ニエレレ、M・ディア、T・ムボヤ、K・エンクルマ、L・サンゴールなどのアフリカ社会主義に関する論説、ガーナにおける社会主義と民間企業についてのドキュメントが収められている。

それでは以下簡単に内容にふれておこう。まず序論では、アモーフラスといつてもいいほどのアフリカ社会主義の多元性が指摘され、つづいてこの多元性のなからなんらかの統一性をひきだすた

めの試みがおこなわれる。編者は、アフリカ社会主義がほんの五年まえまでは一般に知られていなかったほどのあたらしいドクトリンであることから説きおこし、それが単一の思想家の所産でなく、複数の指導者がそれぞれ異なつた条件のなかで展開する実践活動のなかからうみだされてきたという点に、その多元性の根拠をもとめる。さらに編者はアフリカ社会主義が曖昧かつ非体系的であることについて、「イデオロギー」というものは、最初は理窟つばい思考の評価基準を満足させえないような、高度に弾力性をもつたアモーフアスな觀念の組合せになる傾向があるが、その一般的方向について見解の一致がうまれ、しかも理論家たちがその信条を体系化する時間をもてば、やがてそれは明確なかたちをもつはずである」という前提にたつて、「アフリカ社会主義は、いろいろな時代の多岐的な要求を満足させるようなイデオロギーをみいだすための試みとして、ただしコンテクストのなかで観察されねばならない」(二頁)とのべている。要するにアフリカ社会主義は、そのイデオロギー的側面においていまや形成過程にあるのであり、多元性の極から統一性の極に向つていまや進行中なのである。

ついで編者は、このような形成過程にあるそれぞれのアフリカ社会主義が、三つの共通した問題領域をかかえていることを指摘する。すなわち、(1)大陸の一体性の問題、(2)経済開発の危機、(3)コントロールと階級形成のディレンマ、がそれである。これらのうち、(1)についてはたとえばサンゴールのいわゆるネグリテュード(Négritude)やエンクルーの主張する「アフリカの個性」(African Personality

をからませて特殊アフリカ的内容をアフリカ社会主義にもりこもうとして指摘される。このようにアフリカ大陸全体をカバーする統一的イデオロギーの役割をアフリカ社会主義に課することによつて、アフリカ社会主義に、独立以前の段階における反植民地主義と同一の機能を果たさせようとするのが狙いだといふのである。(2)については、前述のように、アフリカ社会主義が急速な経済開発ないし工業化の手段としての役割を担っていることが指摘される。経済の計画化・経済の方向づけ・政府による資本蓄積・アフリカ共同市場の設置等は、すべてこの問題に関連したものである。また(3)については、編者はつぎのように指摘している。すなわち、独立以前の段階では反植民地主義を主軸としてナショナリズムの高揚を持続しえたが、独立以後の段階においては、反植民地主義の比重が低下したためにナショナリズムの形骸化といつた傾向があらわれはじめたので、急速な工業化を目標として長期的に大衆のエネルギーを結集するために、アフリカ社会主義のイデオロギーを形成する必要がある。要するに独立を境として、ナショナリズムはアフリカ社会主義によつて代置される、といふのである。この場合アフリカ社会主義の特殊アフリカの性格を強調するために、伝統的アフリカ社会は本来無階級のであり、共同体的であり、平等な社会であつたとされる。そして、工業化によつて相対立する利害をもつた集団(編者はこれを階級と呼ぶ)が発生するのを防止し、アフリカ社会を将来も無階級のまゝに維持するために、勤勉と自己犠牲の精神がアフリカの伝統に根ざすものとして強調される、といふのである。

る。

つぎの「基本的な社会的傾向」と題する論文では、アフリカ社会主義の社会学的研究がおこなわれている。著者フリードランドは、アフリカ社会主義のなかにつぎのような四つの基本的傾向をみとめる。第一は労働の社会的義務である。これは、人間は社会の物質的条件を向上させるために労働する義務があるという觀念にもとづくものであるが、著者は、ニエレレ(タンザニア大統領)の言葉を引用しつつ、アフリカ指導者がこの義務観の根拠をアフリカの伝統社会にもとめていることを明らかにしている。ただこの点について著者は、アフリカ指導者が労働の義務の伝統性を過度に強調していることを指摘するとともに、それは逆に伝統的な労働観が資本蓄積を促進するほどのものでないことをかれらが知っているからであろうと推測し、実際には急速な経済成長に必要な組織的労働習性が人民のあいだにまだ発展していない、と断じている。第二は労働組合の生産主義的組織への転換である。西欧植民地主義支配のもとでは、アフリカの労働組合は結局自分たちの生活水準の向上あるいは分配の増加だけに力点をおいた消費主義的性格のものであった。しかし、独立以後は、アフリカ社会の無階級性に立脚して、生産主義への転換しつつあるというのである。第三は無階級社会への志向である。この点については序論の紹介ですでにふれたごとくであるが、著者は要するに階級というものはヨーロッパの所産であつて、本質的にアフリカ社会とは無縁のものである、というアフリカ社会主義者の基本的認識を紹介し、それに立脚したかれらの現代無階級社会

のヴィジョンの甘さを批判するのである。第四は「中心的組織」をもつ社会、への志向である。著者は議論の前提として、現代社会は一般に複合社会すなわちいく多の組織が重層しているがそのいずれもが全体を支配しない社会(真正複合社会)であるのに対して、なかにはナチス・ドイツやソ連の如く全体を支配する組織をもつた複合社会があるとし、アフリカ社会主義のなかにには後者への志向性が顕著にみられると主張する。ガーナを例にとれば、会議人民党(CPP)が中心的組織である。著者の分析によれば、こうした志向性をささえているのは、指導者の反部族主義にはかならない。農村のアフリカ人にいまなお強い支配力をもっている部族主義は、指導者が目標としていた nation state 建設の障害となる。そこでこの部族主義を、中心的組織を通じてコントロールしようというのである。こうした方式もまたアフリカ社会の伝統をふまえている。すなわち、アフリカ人が伝統的に kinship を軸とした求心的社会への志向性をもっている点に着目し、そのメカニズムを利用しようとする——というのが著者の観察である。

モースの「アフリカ社会主義の経済学」はかならずしも「経済学」的な論文ではなく、むしろアフリカ社会主義の経済政策に関する概観といった感じをあたえる。ここでもまずもつてアフリカ社会主義概念のアモーフアスな性格が指摘され、ついで、アフリカ社会主義は経済開発という現実の要請にはほとんど寄与しえないものであり、またかりに工業化が進行するにしてもそれはアフリカ社会主義者のヴィジョンとはまったく異つた方向を目指すものとなるう、

と論断される。そして著者は結論としてもし指導者たちのえがいてあるアフリカ社会主義が実現されるとすれば、それは経済成長を犠牲にすることであろうという、きびしい評価をあたえているのである。これに対してコピトフの「社会主義と伝統的アフリカ社会」では、伝統主義的アフリカ社会主義のもつ予言的価値はむしろいけれども、それがイデオロギーの水準で政策の道具としてはたす役割は無視できないとされ、また、伝統主義的社会主義の神話はすでに精緻化されつつあるから、それがより広範囲にひろまれば大衆のあいだに社会主義の受け入れ体制がつけられるであろうという積極的評価がなされている。

「一社会主義者のアフリカ社会主義観」(ロバート)、アフリカ社会主義について——ソヴェトの見解」(ポテーヒン)は、ともに伝統的(ないしヨーロッパ的)な社会主義の思考の枠組のなかでアフリカ社会主義を検討している。ロバートはフェビアニズムの角度から考察をおこない、ポテーヒンはマルクス主義的コンテクストにおいて分析する。ポテーヒンの論点は、アフリカ諸国は資本主義段階をバイ・パスして社会主義段階に移行しようということ、アフリカ社会主義は科学的社會主義へ発展する潜在性を秘めているということころにある。ここで注目すべきは、ポテーヒンが科学的社會主義を幅広く解釈していることであろう。「アフリカ社会主義」よりも「社会主義へのアフリカのコース」とかれが呼ぶのは、こうした解釈を土台としているからである。

以下、「ダカール会議」(ツルバグ)では一九六二年十二月にセ

ネガル政府の主催で開かれた「開発政策と社会主義へのアフリカのアプローチに関する会議」の分析が試みられ、第二部におさめられた四論文では、ガーナ、ギニア、マリ、タンガニカといった特定の国の「社会主義」に対してそれぞれ異つた角度からのアプローチがなされている。

三 本書の概要は以上のごとくであるが、ここに二、三の読後感をつつてくわえて本稿のむすびとしたい。まず第一は、多くの論者がほぼ一致して、イデオロギーの未熟さ→アフリカ社会主義の無効性、という認識にたつているという点についてであるが、本来イデオロギーのもつ影響力はかならずしもその未熟さや精緻さに比例するものではないように思われる。ことにアフリカ社会主義の場合、その根拠を伝統的社会にもとめたことは現代アフリカに顕著にみられる主体性の要求とも合致するだけに、かりにそれが具体的な政策を直接うみだせなくとも、政策を方向づけるだけの牽引力はもちうるのではなからうか。いささか抽象的ないかたではあるが、急速な変革過程にある社会に投入されたイデオロギーは、たとえ未熟なものであつても、それだけの魔力をもちうるように思われるのである。

つぎに、工業化が進行すれば異つた利害をもつ人間の集団がかならず出現するからアフリカ社会主義の目標である無階級社会の維持は不可能だ、という主張についてであるが、もし利害の異つた人間集団をもつて階級とするならば、階級は永遠に消滅せず、したがつてひとりアフリカ社会主義のみならず、マルクス主義もまた崩壊す

ることになろう。要するに問題は、アフリカ社会主義のいう無階級状況とはどういう状況かということに十分吟味せずに恣意的な階級概念をもつて批判したところにあると思われる。

以上のような諸点についていささか疑問らしきものを感じはするが、本書がアフリカ社会主義に関する数少ない文献のうちではほとんど唯一のアカデミックな労作であるという点については、なんら異論をさしはさむ余地をみいだせない。編者は序論のなかで、「本書を構成するにあたって、現時点で可能なかぎりの、完全かつ詳細なアフリカ社会主義の分析を提示しよう」と試みた」（一〇頁）とのべているが、この試みは九分通り成功したといつていい。今後おこなわれるいかなるアフリカ社会主義研究も、本書を無視することはできないであろう。

（小田英郎）